



「3つの合言葉」元気・学び・会話

町の子供は町で育てる

## 滑川町教育委員会だより

「学んでよかった町へ -チーム滑川での教育-」

## 私たちにもできる平和への一歩

平和をつくる人々や一人ひとりには微力であっても、無力ではありません。

私たち地球市民が声を上げ、力を合わせれば、今の難局を乗り越えることができます。国境や宗教、人種、性別、世代などの違いを超えて知恵を出し合い、つながり合えば、私たちは思い描く未来を実現することができます。長崎は、そう強く信じています。

令和六年八月九日  
長崎市長 鈴木史郎  
(長崎平和祈念式典 長崎平和宣言より)

今もなお、世界では戦争が続いています。七九年前と同じように、生きたくても生きることができなかつた人たちが、明日を共に過ごすはずだつた人を失つた人たちが、この世界のどこかにいるのです。本当にこのままでよいのでしょうか。願うだけでは、平和はおとずれません。色鮮やかな日常を守り、平和をつくっていくのは私たちです。

一人一人が相手の話をよく聞くこと。「違い」を「良さ」と捉え、自分の考えを見直すこと。仲間と協力し、一つのことを成し遂げること。

私たちにもできる平和への一歩です。さあ、ヒロシマを共に学び、感じましょう。そして、家族や友達と平和の尊さや命の重みについて語り合ひましょう。世界を変える平和への一歩を今、踏み出します。

令和六年八月六日  
広島市立祇園小学校 加藤 晶  
広島市立八幡東小学校 石丸 優斗  
(広島平和祈念式典 平和への誓いより)

8月15日(木)正午、町役場では来庁者にも御協力いただき、町職員全員が黙祷を捧げました。「八月や六日九日十五日」6日は広島原爆の日、9日は長崎原爆の日、そして15日は終戦の日。詠み人知らずのこの句は、280万人もの犠牲者を生んだ太平洋戦争の記憶を継承することの大切さを訴えています。パリオリンピック卓球競技で大活躍した早田ひな選手は、日本に帰国してやりたいこととして「鹿児島の特攻資料館(知覧特攻平和会館)に行きたくて生きていたい」と語っていました。「21世紀は人権の世紀」といわれて早くも四半世紀を迎えようとしています。ロシアのウクライナ侵攻やイスラエル・ハマス紛争の現実、最大の人権侵害である戦争が決して過去の記憶などではないことを示しています。

沖縄慰霊の日(6月23日)と終戦の日が近づくことと各メディアは、戦争の記憶を風化させまいと戦争関連の報道を行います。長崎原爆の日、平和祈念式典で被爆者代表の三瀬清一郎さんは「(通っていた学校の様子を見に行く)体育館の中は夏の暑さと漂う異臭で地獄のような状態でした。先程まで苦しさにわめいていた人が急に静かになったと思ったら、すでに息絶えており、大人が頭と足を抱えて校庭に運び出し、穴を掘り、板の上に遺体を載せて焼いていました。自分の学校が死体処理場になった光景は、今でも忘れられません」と語りました。戦争は、私たちの想像を絶する惨禍をもたらします。NHKの朝ドラ「虎と翼」では「総力戦研究所」が登場しました。総力戦研究所では、各官庁・陸海軍・民間などから選抜された若手エリートたちが、各種データを基に分析し、日米戦争の展開を研究予測しました。その結論は「日本必敗」というものでした。合理的に考えれば、アメリカと戦争することなどあってはならないことだったのです。しかし、現実には歴史が示すとおりです。「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」(ビスマルク)といえます。私たちは、歴史に学ばなければなりません。

宮前小学校と福田小学校には、戦死した兵士を慰霊するための忠魂碑が建立されています。先人たちは、どうして建立場所に小学校を選んだのでしょうか。私は、村の子供たちに「平和をつくる人」になって欲しいと願いを込めたことだったのではないかと思います。

この夏、私は「共生の作法」(井上達夫)という言葉と出会いました。意見が違うからといっていがみ合うのではなく、他者との違いを認めた上で対話をしたり、協働したり、「納得解」を形成したりと「共生の作法」を身につけることが求められます。広島平和祈念式典での「平和への誓い」のとおり、「一人一人が相手の話をよく聞くこと。『違い』を『良さ』と捉え、自分の考えを見直すこと。仲間と協力し、一つのことを成し遂げること」の延長に「平和」があるのではないのでしょうか。

# 金メダリスト 北口榛花の学ぶ力

この夏に開催されたパリオリンピックでは、日本選手が大活躍しました。陸上競技では北口榛花選手がやり投げで金メダルを獲得しました。フィールド種目としては日本人女子初めての快挙です。

北口選手は、北海道・旭川東高でやり投げを始めてから2年余りで世界ユース選手権に優勝しましたので、天賦の才に恵まれた選手ということができると思います。将来を期待されましたが、大学進学後は、指導者が不在だった時期も経験し、伸び悩み、限界を感じるようになりました。転機は2018年、ヨーロッパで開催されたやり投げの国際講習会で、チェコ出身のセケラックコーチと出会ったことでした。チェコは男女とも世界記録を持つ選手を生んだやり投げの強豪国です。北口選手は、自らの競技者としての環境への不安を打ち明け、指導を願い出ました。2019年からチェコでの生活が始まると、言葉の壁にぶち当たります。子音が複雑なチェコ語の習得は困難を極めました。 「競技に限らず、大切なのは学ぼうとする姿勢なのだ」と気づいた北口選手は、「チェコの人々は他国の人々が自分たちの言葉を話せないだろうという前提で接してくれる」ことも幸いして、障壁を乗り越えます。また、練習内容は、ランニングやウエイトトレーニングなど下半身強化のための辛い基礎練習が中心でしたが、「私は投擲選手として下半身が弱い」という自覚から黙々と練習に励みました。また、投擲の能力だけでなく、海外生活を通して積極性や精神的な強さも身につけました。その成果が金メダルにつながりました。

哲学者の内田 樹は、中2国語の教科書（教育出版）に「学ぶ力」という文章を書き下ろしています。その中で、「学ぶ力が伸びるために必要なのは、第一に、『自分は学ばなければならない』という己の無知についての痛切な自覚があること。第二に、『あ、この人が私の師だ』と直感できること。第三に、その『師』を教える気にさせる広々とした開放性」だとしています。

北口選手が、現状に満足せず活路を海外に求めたこと、必ずしも著名な指導者ではなかったセケラックコーチを自分の「師」だと直感したこと、チェコでの生活環境に順応し、コーチの指導を受け入れたことは、内田が考える「学ぶ力」を伸ばすための条件に合致するものと言えます。

北口選手の海外に飛び出す勇気や姿勢を大いに参考にしたいものです。



フィールド

## 「滑川町の城館跡」 part3

### 【谷城跡】※戦国時代

谷城は滑川村史編さんの際に確認された城跡です。谷城も資料がなく詳細は分かりませんが、山田城・山崎城のある丘陵西側の水田のある平地を挟んだ反対側の丘陵上にある小さな城跡です。

この城は、西に張り出す丘陵の先端部を2本の堀切で区切り郭としており、堀切は深さ約1.2mです。堀の内側には掘った土を盛った60cm程の土塁状の高まりがみられます。4段ほどの段築と堀切のみの粗い造りであり、一時的な利用のためのものであったと考えられます。



谷城跡西側からの全景



山田城、山崎城、谷城3城の位置関係